

敷島町文化財調査報告 第20集
(山 梨 県)

松ノ尾遺跡 VI

集合住宅建設事業による町道拡幅工事に伴う
平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

敷島町文化財調査報告 第20集
(山 梨 県)

松ノ尾遺跡 VI

集合住宅建設事業による町道拡幅工事に伴う
平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

序 文

敷島町では、昭和 52 年に『金の尾遺跡』において大規模な発掘調査が実施され、弥生時代の集落と墓域が発見され、当時山梨県を代表する大変貴重な遺跡であることが認識されました。

その後、昭和 62 年に県内で最も古い瓦窯で、その操業が 7 世紀後半の白鳳時代まで遡るとされる『天狗沢瓦窯』が発見され、平成 6 年には松ノ尾遺跡において、平安時代終わり頃の金銅製小仏像が 2 軀出土し、さらに平成 13 年度に調査した平安時代の村続遺跡では、銅製小仏像の台座や緑釉陶器、中国陶磁などが遺構内外から出土するなど、貴重な調査成果が年々蓄積されてきております。

今回報告する松ノ尾遺跡の第 VI 次調査は、第 I 次調査で金銅製小仏像が出土した場所からさらに北東部に位置し、同じ遺跡内でもこれまで調査の手が及んだことはなく詳細が不明な地域でしたが、平安時代を中心とする住居跡 3 軒、土坑 4 基、ピット 7ヶ所が発見され、北部への遺跡の広がりとその時期について明らかとなり大きな成果を収めることができました。

今後一層調査・記録を精密に行い、地域文化の発展に寄与できるよう努力してまいります。

最後に、開発者山田明義氏の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成 16 年 4 月

敷島町教育委員会



教育長 山 口 正 智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町中下条地区に所在する松ノ尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、集合住宅建設にあたり町道拡幅工事に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約80㎡である。
発掘調査から報告書刊行までの経費は、開発者である山田明義氏が負担した。
3. 発掘調査は、平成13年（2001年）7月19日～27日までの6日間にわたって行った。
また、整理作業は平成14年（2002年）12月～平成16年（2004年）4月にかけて断続的に実施した。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査指導担当者	小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
5. 本書の執筆・編集および遺構・遺物の写真撮影は小坂隆司が担当した。
6. 発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々よりご教示を賜った。ここにご芳名を記し、感謝申し上げます。
（順不同、敬称略）
中込司朗、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畑 大介（敷島町文化財審議会）
7. 発掘調査ならびに整理作業参加者（敬称略）
青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、高添美智子、堤 吉彦、保延 勇
望月典子、森沢篤美、関本芳子
8. 本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 本書の第1図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000）「甲府市北部」「韭崎」「甲府市」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。
2. 遺物挿入中、断面白抜きは土器、は須恵器、は陶器類である。
3. 図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本文目次

序文

例言・凡例

第1章 遺跡をとりまく環境

- | | |
|---------------|---|
| 1. 遺跡の立地と環境 | 1 |
| 2. 周辺遺跡と歴史的背景 | 1 |

第2章 遺構と遺物

- | | |
|--------|---|
| 1. 住居跡 | 6 |
| 2. 土坑 | 8 |
| 3. ピット | 8 |

第3章 遺構外出土遺物

第4章 まとめ

挿図目次

- | | | | |
|-----------------|---|----------------------|----|
| 第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡 | 2 | 第6図 3号住居跡と出土遺物 | 8 |
| 第2図 調査区位置図 | 5 | 第7図 土坑と出土遺物 | 9 |
| 第3図 遺構配置図 | 5 | 第8図 ビット | 9 |
| 第4図 1号住居跡と出土遺物 | 6 | 第9図 遺構外出土遺物 | 10 |
| 第5図 2号住居跡と出土遺物 | 7 | 第10図 第VI次調査区とその周辺概要図 | 11 |

表目次

- | | | | |
|------------------|----|-----------------|----|
| 第1表 1号住居跡出土遺物観察表 | 6 | 第5表 4号土坑出土遺物観察表 | 10 |
| 第2表 2号住居跡出土遺物観察表 | 7 | 第6表 土坑一覧 | 10 |
| 第3表 3号住居跡出土遺物観察表 | 7 | 第7表 ビット一覧 | 10 |
| 第4表 3号土坑出土遺物観察表 | 10 | 第8表 遺構外出土遺物観察表 | 11 |

図版目次

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 図版1-1 調査区A区全景 | 図版2-7 3号住居跡遺物出土状態(1) |
| 図版1-2 調査区B区全景 | 図版2-8 3号住居跡遺物出土状態(2) |
| 図版2-1 1号住居跡 | 図版3-1 1号土坑 |
| 図版2-2 1号住居跡出土遺物 | 図版3-2 2号土坑 |
| 図版2-3 2号住居跡 | 図版3-3 3号土坑 |
| 図版2-4 2号住居跡出土遺物 | 図版3-4 4号土坑 |
| 図版2-5 3号住居跡 | 図版3-5 土坑内出土遺物 |
| 図版2-6 3号住居跡出土遺物 | 図版3-6 遺構外出土遺物 |

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境 (第1図)

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾野を形成するなどらかな赤坂台地が貫川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17 km、東西約4 kmと南北に細長い町である。本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおそ大別されるが、町域のほぼ8~9割は標高1,704 mを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貫川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

2. 周辺遺跡と歴史的背景 (第1図)

近年もっとも頻りに発掘調査をおこなっている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期に稀な埋燵炉を有する縄文時代前期末の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれてきたが、1987年の中央高速自動車道建設における第1次調査で弥生時代の集落跡とともに縄文時代の住居跡計8軒(前期末1軒、中期7軒)が調査された。

松ノ尾遺跡の南部でも中期中葉にあたる住居跡1軒が確認されている(第Ⅲ次調査)が、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できるのは今のところ金の尾遺跡である。

弥生時代 金の尾遺跡があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。第1次調査で弥生時代の住居跡32軒、方形・円形周溝墓17基をはじめ、集落跡を二分するとみられるV字の溝などが発見されており、県内でも最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物を見ると、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

近年の第Ⅳ次調査で、1次調査で発見されたV字溝の延長を確認、発見された方形周溝墓には弥生時代後期のものをはじめとし、古墳時代前期、そして壺型埴輪を伴う古墳時代中期に該当する低墳丘墓も新たに確認された。1996年の第Ⅶ次調査では集落を外周する長さ約55 mにおよぶ大溝(環濠跡)が出ている。

古墳時代 これまで6遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡(Ⅰ次)では調査区内の落ち込みから水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点、末法遺跡



第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡

- 松ノ尾 1
 松ノ尾 2
 松ノ尾 3
 松ノ尾 4
 松ノ尾 5
 松ノ尾 6
 松ノ尾 7
 松ノ尾 8
 松ノ尾 9
 松ノ尾 10
 松ノ尾 11
 松ノ尾 12
 松ノ尾 13
 松ノ尾 14
 松ノ尾 15
 松ノ尾 16
 松ノ尾 17
 松ノ尾 18
 松ノ尾 19
 松ノ尾 20
 松ノ尾 21
 松ノ尾 22
 松ノ尾 23
 松ノ尾 24
 松ノ尾 25
 松ノ尾 26
 松ノ尾 27
 松ノ尾 28
 松ノ尾 29
 松ノ尾 30
 松ノ尾 31
 松ノ尾 32
 松ノ尾 33
 松ノ尾 34
 松ノ尾 35
 松ノ尾 36
 松ノ尾 37
 松ノ尾 38
 松ノ尾 39
 松ノ尾 40
 松ノ尾 41
 松ノ尾 42
 松ノ尾 43
 松ノ尾 44
 松ノ尾 45
 松ノ尾 46
 松ノ尾 47
 松ノ尾 48
 松ノ尾 49
 松ノ尾 50
 松ノ尾 51
 松ノ尾 52
 松ノ尾 53
 松ノ尾 54
 松ノ尾 55
 松ノ尾 56
 松ノ尾 57
 松ノ尾 58
 松ノ尾 59
 松ノ尾 60
 松ノ尾 61
 松ノ尾 62
 松ノ尾 63
 松ノ尾 64
 松ノ尾 65
 松ノ尾 66
 松ノ尾 67
 松ノ尾 68
 松ノ尾 69
 松ノ尾 70
 松ノ尾 71
 松ノ尾 72
 松ノ尾 73
 松ノ尾 74
 松ノ尾 75
 松ノ尾 76
 松ノ尾 77
 松ノ尾 78
 松ノ尾 79
 松ノ尾 80
 松ノ尾 81
 松ノ尾 82
 松ノ尾 83
 松ノ尾 84
 松ノ尾 85
 松ノ尾 86
 松ノ尾 87
 松ノ尾 88
 松ノ尾 89
 松ノ尾 90
 松ノ尾 91
 松ノ尾 92
 松ノ尾 93
 松ノ尾 94
 松ノ尾 95
 松ノ尾 96
 松ノ尾 97
 松ノ尾 98
 松ノ尾 99
 松ノ尾 100

(Ⅱ次)では1号住居跡から凝灰岩質の石材で加工途中とみられる管玉1点と剥片類が出土し、周辺に該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡(第Ⅳ・Ⅵ次調査)でも多くの遺物が出土しており、とくにⅣ次調査では本町で初めてとなる該期の周溝墓が2基確認されたことから、さらに周辺で新たな集落跡も今後発見される可能性が実が高い。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡1軒がある。

末法遺跡(Ⅰ次)では1号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種と量も充実している。

金の尾遺跡(Ⅳ次)1号住居跡や御岳田遺跡(Ⅰ次)2号住居跡からも甕、甗、坏、高坏などがみられる。

その他、遺構は確認されていないが松ノ尾遺跡の第Ⅱ次調査で該期の大型の有段高坏坏部2个体(口径約25cm、深さ約5.0cm)が出土していることから、周辺には該期の遺構・遺物が点在するようである。

なお、金の尾Ⅳ次調査の周溝墓群には二重口縁をもつ「壺形埴輪」を出土したものが1基存在する。

後期の甲府盆地北西部は、6世紀中頃から横穴式石室を有する後期古墳が築造されるようになる。

荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳4や県内で2番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳5の存在などからこの頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳(千塚・山宮古墳群-甲府市、赤坂台古墳群-双葉・竜王など)が取り巻くようになる(第1図●印)。

敷島町内にも戦後間もない頃にはまだ4・5基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳29と大庭古墳30が存在するのみとなっている。

また、松ノ尾遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれた土砂に相当すると考えられる包含層中から須恵器の碌、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるようなものが出土している。

当時の人々が暮らしていた集落跡は、本町内では現在のところ松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、他では金の尾遺跡の第Ⅱ次調査で住居跡1軒が遺跡の北東端で唯一確認されているだけである。

松ノ尾遺跡は各次調査でこの時期の住居跡が常に発見されているが、周辺遺跡と比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ次調査では住居跡が重複に重複してみつかり、とくに第Ⅱ次調査では一辺約7m、第Ⅴ次調査で一辺約8.5mと約8.0×6.0m、第Ⅶ次調査でも一辺約7.7mにもおよぶ大型の住居跡が発見されている。一方、荒川左岸の甲府市千塚に位置する榎田遺跡1でも古墳時代後期の住居跡が12軒発見され、規模が一辺約7m四方を測る大型のものもみられる。集落内におけるこのような大型住居跡の存在について今後その位置付けを考慮していく必要がある。

盆地北西部でのこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天沼沢瓦窯61が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、7世紀後半(白鳳期)とみられている。

この時期に併行する集落跡については、松ノ尾遺跡で近年徐々に住居跡が確認されてきており、また近隣では甲府市の榎田遺跡や音羽遺跡2で古墳時代後期～奈良時代に相当する住居跡が発見されている。

しかし、天沼沢瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された寺院跡は残念ながらまだ発見されていないが、近年の調査で松ノ尾遺跡と村統遺跡④において瓦片が出土してきており、今後更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 該期の遺構は町内で現存もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも総計100軒以上ある。

これまでの調査成果では、奈良時代から平安時代初め頃にかけては発見される遺構も未だ少ないが、平安時代中頃～末頃にかけては急激に遺構数も増加し該期の集落跡が主体を占めている傾向にある。

松ノ尾遺跡①は7回の調査でこれまでに住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、周辺の三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でもその広がりや分布がみられる。

一方、町南部の北側では、原腰遺跡②、山宮地遺跡③などが上げられるほか村統遺跡④では調査面積は狭小であったが計36軒が確認され、詳細は今後の調査によるが大きな集落跡の様相を呈する。

この村統遺跡の南側には現在甲府から双葉へと横断する通称「山の手通り」が走っており、これは甲斐古道

9筋の内の1つにあたる道筋で旧「徳坂道」に相当する。本来茅ヶ岳の麓を經由して甲府の塩部から長野県佐久の川上までを結ぶ甲斐と信州を繋ぐ古道であった。

遺跡出土の遺物を見ると、膨大な量の土器をはじめとし須恵器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品なども出土している。中でも松ノ尾遺跡では墨書土器や円面碗(4個体分の破片)、そして銅製の帯金具や金銅製小仏像2軀が、また村統遺跡では銅製小仏像の台座が1軀出土していることなどが特筆される。銅製小仏像はその出土状態や共伴遺物、文様・鑄造方法などからおおよそ11～12世紀の所産とみられ、しかも現在県内の発掘調査で出土した4例のうち3例が本町で発見されたものとなっている。

一方、平安時代末頃になってくると青磁や白磁などの貿易陶磁器が出土する遺跡がみられるようになる。

中世 該期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡①と山宮地遺跡③の2遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第Ⅶ次調査において一辺約5.2m、最深部約40cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土し、おそらく平安末～中世初頭の遺構とみられる。また、この石組遺構の周辺にはピット群が展開し、この内近接したピットから仏像の頭部にみられる螺髪1点が出土しており、今後これらの遺構・遺物から遺跡の性格を十分に検討していく必要がある。

山宮地遺跡では、近年15・16世紀代とみられる遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第Ⅰ次調査ではカワラケや古銭などが出土した竪穴状遺構1基や土坑などがあり、さらに第Ⅱ次調査において竪穴状遺構4基、土坑14基が発見されている。とくに後者の2号竪穴状遺構からは全国でも初例とみられる数点の銅製仏具がまとまって出土した。

山宮地遺跡の東脇には前述の徳坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修験道の霊場であった金峰山信仰の登山口であったようである。この「御嶽道」と遺跡との位置関係、そして銅製品の内容から「御岳信仰」とのかかりが推測される。

さらに、第Ⅲ次調査ではカワラケと古銭が埋納された計32基にのぼる土塚墓群が検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきている。

本遺跡の東隣には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部には宇大庭に武田家の家臣であった「土屋惣藏昌恒」屋敷跡66が存在したという記述がみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えていく上でも今後重要な地域であるといえよう。

このように、近年の発掘調査ではこれまで判然としなかった中世の様相も徐々に明らかになりつつある。

明確な遺構はまだ判然としないが、これまで調査を行ってきた各遺跡では量的には僅少であるがカワラケや常滑、瀬戸・美濃などの陶器類、そして白磁、青磁などの貿易陶磁器などの出土が目立ってきており、今後盆地北西部地域における中世の様相を把握していくうえで注目される。

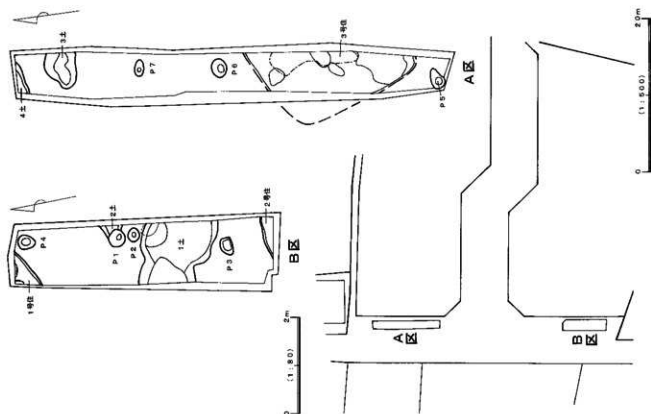
ほんの10年ほど前までは敷島町が所在する甲府盆地の北西部地域は調査の手がほとんど及ぶことがなかったことから、歴史の上では空白地帯ともなっていた。

しかし、以上みてきたように町内では、小規模調査にもかかわらず、内容の濃い成果が近年徐々に蓄積され始めてきている。

以下では、平成13年度におこなわれた松ノ尾遺跡第Ⅵ次調査の成果について時期ごとに報告していく。



第2図 調査区位置図



第3図 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

平成6年度に第1次調査がおこなわれた都市計画街路愛宕町下条線は松ノ尾遺跡のほぼ中央を東西に横断しており、この愛宕町下条線より南側あるいはそれに隣接した場所を中心として、これまでに開発に伴う調査が頻繁におこなわれてきている。その結果、本遺跡が古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落跡であることが明らかとなってきている。

今回の第VI次調査は松ノ尾遺跡の北部における初めての調査となり、本遺跡の全容を解明していく上で大きな調査成果を得たといえよう。以下、第VI次調査についてみていきたい。

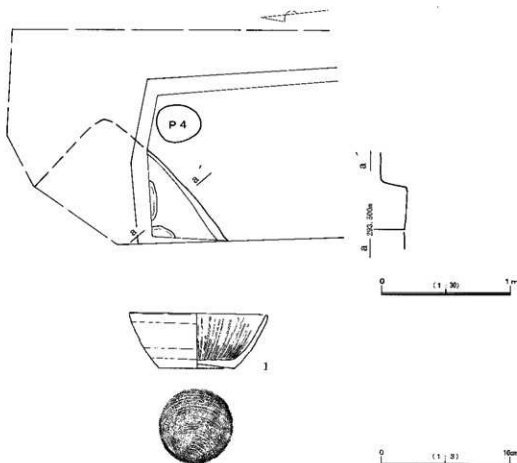
1. 住居跡（第3図、第1表、図版1、2）

今回、平安時代の住居跡3軒が発見された。

a. 1号住居跡（第3・4図、第1表、図版1-2、2-1・2）

調査区B区の北西隅部に位置する。試掘調査において本住居跡の北東隅部コーナーを確認し、本調査において掘り上げをおこなった。確認できたのは住居跡南壁部の東西約0.93m、掘り込みの深さ約20cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面上には大きな石が置かれていた。

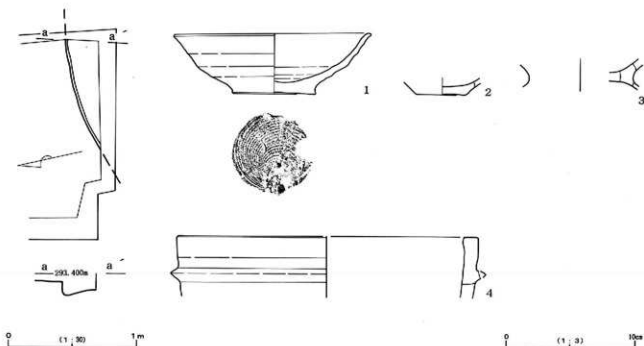
本住居跡は南壁際から出土した坏1から9世紀後半に所属する。



第4図 1号住居跡と出土遺物

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			長さ	口径	高さ					
1	土師器	SC	4.4	1.0	3.0	赤、黒石、石炭、褐色粘土	赤褐色	R	内面斜対称縄文、重粘土切痕	2-2

第1表 1号住居跡出土遺物観察表



第5図 2号住居跡と出土遺物

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			高さ	口径	底径					
1	土師質土器	杯	4.9	1.6	2.6	焼、赤・黒色質物	赤黒褐色	良	底面未切取	2-4
2	土師質土器	小皿	1.0	—	(3.8)	焼、赤・黒色質物	赤黒褐色	良	底面未切取	2-4
3	土師質土器	膝高台杯	1.8	—	—	焼、赤石、赤・黒色質物	赤褐色	良	底面未切取	2-4
4	土師質土器	羽釜	3.7	2.1	0	焼、赤石、赤・黒色質物	赤黒褐色	良	—	2-4

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

b. 2号住居跡 (第3・5図、第2表、図版1-2、2-3・4)

調査区B区の南端に位置している。確認できたのは東西約0.93m、南北約0.26mの極僅かな範囲であった。床面は住居跡中央から壁際に向かってわずかに深くなっていく傾向があり、壁は深さ約11cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

北側の壁際に近い床面上に杯1が据え置かれた状態で出土している。他、覆土中からは小皿の底部2、脚高台杯3、羽釜口縁部4などが出土しており、本住居跡は11世紀後半に所属する。

c. 3号住居跡 (第3・6図、第3表、図版1-1、2-5~8)

調査区A区の中央から南側に位置する。本住居跡も大半が調査区外となるが幸いにも北壁と南側コーナー部を確認できたことから、一辺が約3.0mの方形を呈すると考えられる。

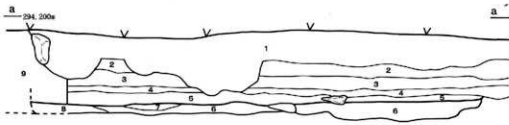
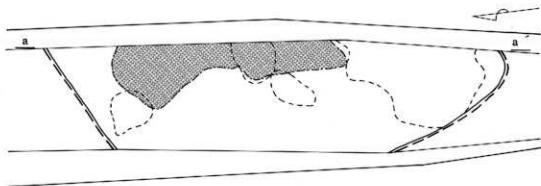
カマドや柱穴といった施設はみられなかったが、住居跡南側を主体として固く踏み締まった土間状の床面が広がっており、北側へと向かってブロック状に散在してみられる。

そして、住居跡の中央から北にかけては焼土が床面に薄く堆積していた。

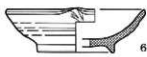
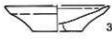
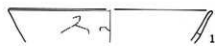
遺物は、土師器杯1、土師質土器杯2、土師質土器の小皿3・4、柱状高台小皿5、灰釉陶器碗6(口縁輪花)・不明土製品7などがあり、本住居跡は11世紀後半に所属するとみられる。

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			高さ	口径	底径					
1	土師器	杯	2.0	1.5	7	焼、赤石、赤黒砂子	赤褐色	良	口縁口縁部	2-6
2	土師質土器	杯	2.3	1.4	4	焼、赤石、赤褐色	赤褐色	良	口縁口縁部	2-6
3	土師質土器	小皿	2.0	(3.1)	(3.8)	焼、赤石、赤・黒色質物	赤褐色	良	底面未切取	2-6
4	土師質土器	小皿	2.0	(3.6)	(4.8)	焼、赤・黒色質物	赤褐色	良	底面未切取	2-6
5	土師質土器	柱状高台杯	2.6	—	(5.8)	焼、赤石、赤・黒色質物	赤褐色	良	底面未切取	2-6
6	陶器	碗(口縁輪花)	3.4	1.0	8	焼、白・赤色砂子、赤石	灰白色	良	内面自然特行筆	2-6
7	土製品?	—	—	—	—	焼、赤褐色	良	小皿、杯などと同じ粘土	2-6	

第3表 3号住居跡出土遺物観察表



- 1. 赤土層
- 2. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 3. 赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 4. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 5. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 6. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 7. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 8. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。
- 9. 厚赤土層 砂多中粒、磁物なし、砂子混。

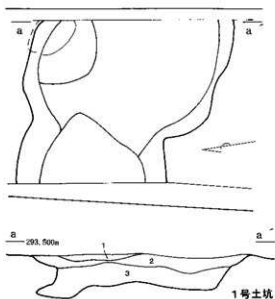


第6図 3号住居跡と出土遺物

2. 土坑 (第3・7図、第4～6表、図版3-1～5)

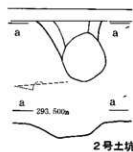
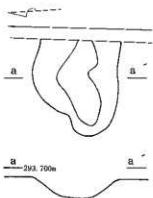
4基の土坑が確認された。1号土坑は、2つの土坑が重なっているかもしれない。4号土坑は、調査区内で僅かに確認されただけであるが、遺構内から出土する遺物は土師質土器に限られ、しかも他の土坑に比べ量的に多く出土することから、住居跡のコーナー一部である可能性もある。

3. ビット (第3・8図) ビットについては、第7表にまとめた。

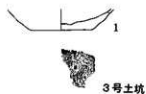


1号土坑

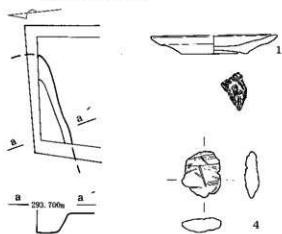
1. 坑縁の上、横溝分叉、陥凹あり、底平地。
2. 坑縁部が傾斜なし、底平なり、陥凹あり、段子壁、30×30cmの横溝とアブツあり。
3. 坑縁部で、縁石あり、陥凹あり、底平地。



2号土坑

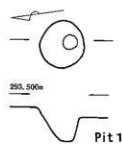


3号土坑

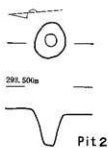


4号土坑

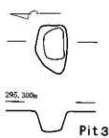
第7図 土坑と出土遺物



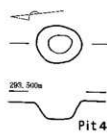
Pit 1



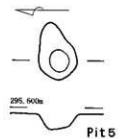
Pit 2



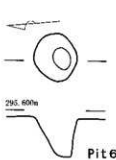
Pit 3



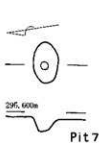
Pit 4



Pit 5



Pit 6



Pit 7

第8図 ビット



No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			長さ	口径	底径					
1	土師質土器	小皿	1.4	—	(5.0)	焼、赤赤、金褐色	赤褐色	B	底面欠損。	3-5

第4表 3号土坑出土土物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			長さ	口径	底径					
1	土師質土器	小皿	1.5	(9.8)	(5.4)	焼、赤石、赤・黒色斑点	赤褐色	B	底面欠損。	3-5
2	土師質土器	小皿	1.7	—	(4.8)	焼、赤石、赤・黒色斑点	赤褐色	B	底面欠損。	3-5
3	土師質土器	小皿	1.7	—	(4.6)	焼、赤・黒色斑点	赤褐色	B	底面欠損。	3-5
4	土師質土器	小皿	—	—	—	焼、赤褐色	赤褐色	B	小皿、坪などと同じ土。	3-5

第5表 4号土坑出土土物観察表

No.	調査区	形態	規模 (m)			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
1号	B区	不整形	1.28	1.04	0.25	北東傾ピットの深さ3.5cm。	3-1
2号	B区	不整形	0.50	0.30	0.12	ピットに上り切られている。	3-2
3号	A区	不整形	0.75	0.67	0.15		3-3・5
4号	A区	方形?	0.75	0.25	0.15	土師質の小皿類が出た。	3-4・5

第6表 土坑一覧

No.	調査区	形態	規模 (m)			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
1号	B区	楕円形	0.39	0.35	0.27		
2号	B区	楕円形	0.29	0.23	0.30		
3号	B区	不整形	0.38	0.26	0.17		
4号	B区	楕円形	0.36	0.30	0.15		
5号	A区		0.45	0.30	0.13		
6号	A区		0.39	0.33	0.33		
7号	A区		0.23	0.19	0.12		

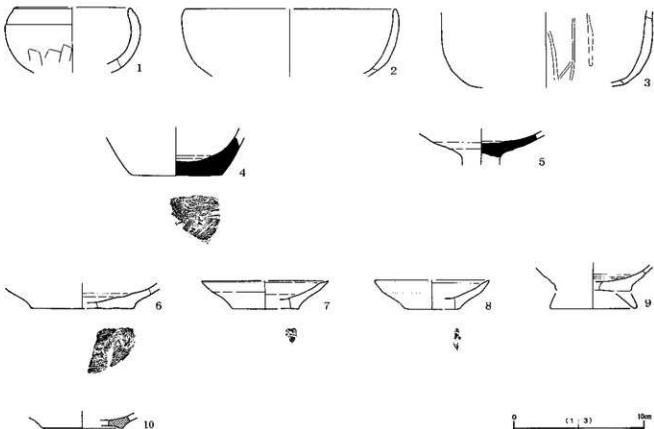
第7表 ビット一覧

4. 遺構外出土物について

狭い調査区であったにも拘らず、遺構外から多くの遺物が出土したが、破片のものが多かった。時期的には古墳時代から平安時代まで断続的ではあるがそれらに相当する遺物がみられる。

1~3は土師器の鉢類で3には内面に暗文がみられる。4・5は須恵器で5は高坏片である。

今回の調査区で最も多く出土しているのが6~9の平安時代終わり頃の土師質土器である。



第9図 遺構外出土遺物

No.	器種	器形	大 小 (cm)			胎土	・色調	焼成	文様・調整・特徴	図号
			高さ	口径	底径					
1	土師器	鉢	4.7	(9.0)	—	黒、赤、赤色斑点、黒色斑付	赤褐色	良	外底へツ筋リ。	3-6
2	土師器	鉢	4.8	(16.4)	—	黒、赤石、赤色斑点	黒灰色	良	—	3-6
3	土師器	甕	5.1	—	—	黒、赤石、赤石、黒色斑付	黄褐色	良	内面放射状線文。	3-6
4	土師器	壺	3.0	(7.0)	—	黒、赤石、白色斑点	黄灰色	良	底面放射状線文。	3-6
5	土師器	甕	1.8	—	—	黒、赤石、赤石、黒色斑付	黄褐色	良	—	3-6
6	土師器土器	鉢	1.5	(8.0)	—	黒、赤色斑点	赤褐色	良	底面放射状線文。	3-6
7	土師器土器	小皿	2.2	(5.2)	(5.2)	黒、赤、赤色斑点	黄褐色	良	口縁放射状線文。	3-6
8	土師器土器	小皿	2.3	(8.8)	(4.0)	赤石、赤、赤色斑点	赤褐色	良	口縁放射状線文。	3-6
9	土師器土器	柳葉形小皿	1.5	—	—	赤石、赤、赤色斑点	赤褐色	良	口縁放射状線文。	3-6
10	灰釉陶器	小皿	1.0	(6.2)	—	—	黒灰色	良	瀬戸・島瀬	3-6

第8表 遺構外出土遺物観察表

第4章 ま と め

冒頭でも述べたように、松ノ尾遺跡はこれまでの調査で、主に古墳時代(6世紀後半)から平安時代(12世紀代)にかけて、長期的に存続した集落遺跡であることが徐々に分かってきている。これまでは、松ノ尾遺跡として現在指定されている遺跡包蔵地内のちょうど中央を横断する愛宕町下条線付近とそれより南側地域にかけて調査がおこなわれてきた。

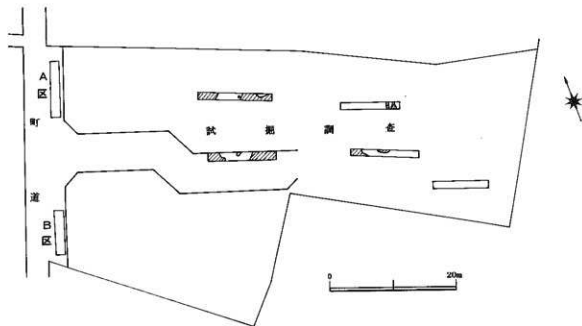
今回の調査は松ノ尾遺跡の北東部にあたり、初めて本遺跡北部地域にメスを入れることとなり、極一部分であったがこれまで不明であった遺跡北部の様相を把握することができた。

第VI次調査は、集合住宅建設で町道となる既存道路の拡幅に伴う調査であったが、成果として、住居跡3軒、土坑4基、ピット7ヶ所を発見することができた。発見された各住居跡の時期は以下のとおりである。

- 平安時代(9世紀後半) 1号住居跡、
平安時代(11世紀後半) 2号住居跡、3号住居跡

また土坑の中で時期がわかるものは3・4号土坑があり、それぞれ11世紀代に属する。

調査範囲が狭いため発見した各住居跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、重複関係はないものの調査区内から検出される遺構の密度はある程度まとまりがあるように思われる。



第10図 第VI調査区とその周辺概要図

4号土坑は、調査した範囲が余りにも部分的であったため今回土坑で扱っているが、他の土坑に比べ時期的にまとまった遺物が多く出土していることから住居跡の可能性も考えられる。

この第Ⅵ次では平安時代後半～末にかけての上師質土器が遺構内外から多く出土している。

今回調査の対象となった南北に走る町道部分よりさらに東側には、平成12年に集合住宅建設による事前の試掘調査が実施されており、東西約10m前後の試掘トレンチを計5ヶ所設定し、地表面下約50cm程で住居跡や溝などの遺構群（第10図）と遺構外から多くの遺物が発見されている。

遺物についてみると、平安時代の9世紀後半～12世紀、そして僅かに手づくね皿が出土し13世紀代に相当するものもみられる。中でも主体となる時期は、内面体部に放射状暗文のある杯や渦巻状暗文を有する皿、削り出し高台の杯など9世紀後半代にあたるものや脚高高台杯、脚高高台皿を中心とした11世紀後半代のものであり、若干柱状高台皿や柱状高台杯もある。しかし、その大半を占めているのは後者の11世紀後半代にあたる土師質土器の一群であった。

以上のように、今回の第Ⅵ次調査区とその周辺の様相から、松ノ尾遺跡の北東部地域では平安時代9世紀後半代では遺構の密度は低い分布を示し、その後平安時代終わり頃（11世紀後半代）になると脚高高台杯・皿などの土師質土器を中心とする時期の遺構と遺物が高い密度で分布する傾向が窺える。

松ノ尾遺跡は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ次調査がおこなわれた遺跡の中央では古墳時代（6世紀後半）から平安時代終わり（12世紀代）まで連続と集落跡が継続している。また、遺物も大量の各時期の土器類や灰釉陶器、緑釉陶器などが出土し、特殊なものには円面硯、帯金具、金銅製小仏像、貿易陶磁器などがある。

この状態は、松ノ尾遺跡の南部（第Ⅲ次調査区）においても同様で古墳時代（7世紀）・平安時代（9～10世紀代）の各時期の住居跡と多くの土器類や灰釉陶器、緑釉陶器、貿易陶磁器などが出土している。

このように、愛宕町下条線の一つの基準とし、遺跡北部（第Ⅵ次調査区）と遺跡中央から南部にかけての地域を比較すると、時期ごとに集落の分布状況に相違がみられるようで、それはとくに平安時代末頃（11～12世紀）において遺跡北部の一带ないしは少なくとも北東部地域においては集落が拡大してきているような感が見受けられる。

最後に、今後更なる精密な調査を進め、松ノ尾遺跡内の各時期における集落の変遷についてきちんと整理をおこないたい。

参考文献

- 大冨正之 1996 「松ノ尾遺跡」 数島町教育委員会
大冨正之 2001 「埋蔵文化財試掘調査年報」01」 数島町教育委員会
小坂隆司 2004 「松ノ尾遺跡Ⅲ」 数島町教育委員会
小坂隆司 2004 「松ノ尾遺跡Ⅴ」 数島町教育委員会



1. 調査区 A 区全景



2. 調査区 B 区全景



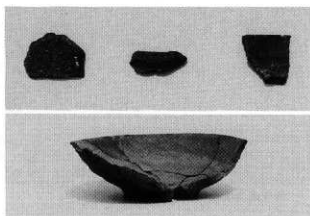
1. 1号住居跡



2. 1号住居跡出土遺物



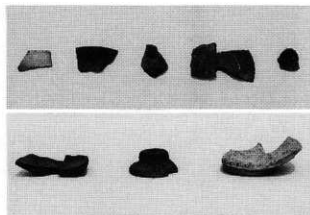
3. 2号住居跡



4. 2号住居跡出土遺物



5. 3号住居跡



6. 3号住居跡出土遺物



7. 3号住居跡遺物出土状態 (1)



8. 3号住居跡遺物出土状態 (2)



1. 1号土坑



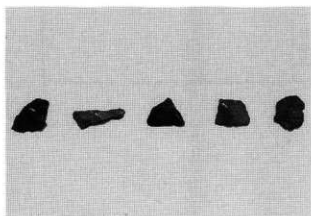
2. 2号土坑



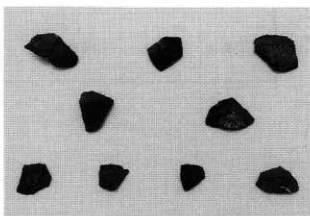
3. 3号土坑



4. 4号土坑



5. 土坑内出土遗物



6. 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき							
書名	松ノ尾遺跡Ⅵ次							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	20							
編著者名	小坂隆司							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	平成16年4月20日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町中下条 1830外	193928	18			平成13年 7月19日～ 平成13年 7月27日	80	アパート建設 による町道 拡幅事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落跡	平安時代	住居跡 土坑 ピット	土師器 須恵器 陶磁器				

敷島町文化財調査報告 第20集

松ノ尾遺跡Ⅵ

発行日 2004年(H16)4月20日

発行 敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020

TEL(055)277-4111

印刷 南協和印刷社

